

## 言えない

今日 あした

善福寺公園の木々が新緑の葉をいっぱいにつけて勢いよく枝を伸ばしている。その中に、葉の上に白い小さな粒のような花をこんもりと載せているのがあった。

「ねーあの木、気持ちが悪いわね、まるで水生動物が背中に卵を載せているように見えない？ 何の木かしら」

並木珠子が前を歩いている夫の菊次郎に追いついて言うと、彼も多少は興味があつたようでチラッと視線を移したが、何が気に入らないのか、その言葉を全く無視した。

菊次郎は定年を過ぎ毎日が日曜日になってからはいつもこんな調子だ。

珠子は専業主婦だが二人の息子たちはそれぞれ独立した。両方の両親も珠子の母を最後に、皆あの世に行ってしまった。彼女にしてみれば、子供にしる親にしる、なにがしかの大変な時期を過ごして来たのだが、終わってしまったえば感慨とてなく、思い出の中で感情が高ぶることすらない。

今は気楽な二人暮らしとなり、毎日のようにこうして二人で散歩をしている。菊次郎が不機嫌そうに道ばたの小さな看板を指さした。

“みずき”と書いてある。

「あら、さっきの木、みずき、っていうのね。ハナミズキとはずいぶん違うわね」

珠子は嬉しくなつて菊次郎の側に行つて言うと、

「こんな狭い道で並んで歩いたら迷惑じゃないか」

彼は吐き捨てるように言った。

「誰も通つていないじゃない！」

小さく口答えをする珠子に、彼は常識を知らない人間に言葉はいらぬ、とでも言いたげに軽蔑をあらわに強い視線を投げつけた。

菊次郎はいつも怒っている。珠子が何かを言うと、どんな言葉にも不快感を示す。普通の顔をしていたって減るものでもあるまいに！ 珠子は胸がざわめき怒りが込み上げる。

「私の何が気に入らないのか、箇条書きにして言つてごらんさい！」とでも言つてやりたいけど、鬼瓦のように威嚇している菊次郎の顔を見ると恐ろしくて何も言えない。その、言えないところがまどろっこしくて菊次郎はイライラ

するのだろうか、言えないものは言えないのである。

散歩から帰ると五時。珠子は座る暇もなく台所に立つ。今日の主菜はユーリンチー  
油 淋 鶏。散歩のついでに買ってきた鶏のもも肉をボールに入れ、酒、醤油、生姜、塩、胡椒を入れて揉んで置く。鍋を火にかけ味噌汁の準備をして、納豆、もずくを器に入れると、第一段階終了。

居間に行くと菊次郎はテレビを点けっぱなしで椅子に座ったまま爆睡をしている。

珠子はジロリと菊次郎を見て、私だって疲れているのよ、と胸の中で言い、起こさないように気を使いながら、二階から順番に雨戸を閉め、慌てて台所に引き返すと料理の続きを始める。

下味をつけた鶏肉に小麦粉と片栗粉をまぶしてフライヤーに入れる。少し前までは油で揚げていたものが、今は便利なフライヤーで時間をセットすると出来てしまう。その間に、醤油、砂糖、酢、ごま油でたれを作って置く。お皿にレタスを敷いて、揚げ上がった鶏肉を食べやすく切って載せ、白髪ねぎと、ニンニク、しょうがのみじん切りをのせて一丁上がり！ ワカメと油揚げの味噌汁に葱を散らして完了。食卓に納豆、もずくも一緒に並べる。

そして菊次郎を起こし、二人でテレビに向かって黙々と飲み、且つ食べる。テレビのチャンネル権はすべて菊次郎。リモコンを傍らに置いて、ニュースを見ているのかと思うと、クイズ番組、お次は旅番組と、カチャカチャ目まぐるしく変わるテレビ画面に珠子はもう慣れた。

彼女は何よりもサスペンスが好きなのに、菊次郎は「でーきれー」だそうだ。「何で大嫌いじゃないの」と聞くと、大嫌いとはレベルが違うほど「でえ嫌れー」だと言う。「朝ドラ」も「二時間ドラマ」も珠子が好きなものはすべて「でえ嫌れー」だそうだ。

菊次郎は風呂から出ると九時には二階に行つて寝てしまう。珠子は後片づけをして風呂に入るとたいいてい十時はまわってしまうが、これからが私の時間よ！とばかりにパソコンを開き、メール、インターネット、フェイスブック、ゲームと次々に……、あつという間に時が経つ。

「まだ起きているのか！ 電気がもつたじゃないか！」

ふいに襖が開き、菊次郎がヌツと顔を出す。心臓が飛び出すほどドキドキする。

「何時だと思っているのだ！」

六十もとうに過ぎていのに、夜中にゲームなどしていると後ろめたい気分

になり、ついひるんで、

「はいはい、すぐ寝ます」と珠子。

「答えは一回！」どすの利いた恐い声が返って来る。

珠子は思う「こんな生活、もういや！」

菊次郎は月に一、二度しか外出しない。学生時代の友人や、会社の同僚達と飲みに行くくらいで出かけても四、五時間で帰って来る。それでも珠子にとつてそんな日は夕食を作らなくて済むので心待ちにしている。だからどこに行くのか、誰と行くのかは一応聞くが、頭の片隅を通過していくだけだった。

あの日の予定はめずらしくハイキングで、午前中から出かけるのだと聞いていた。お昼はコンビニで買うので弁当はいらないそうだ。何の手間もかからない。朝食を済ませのんびりとテレビを見ていると、菊次郎の携帯の音楽が鳴った。

その途端、およそ慌てるのを見たことがない菊次郎が明らかにうるたえて携帯を取り出すと、居間の外に出てドアをピシッと閉めてしまった。

何食わぬ顔をして居間に戻って来た菊次郎に、どうしたの？と聞くと、  
「スケッチ仲間と昼食を食う約束をしていたのだけど、一人が遅れるそうだと、めずらしくきちんとした返事が返って来た。

「お前がしょっちゅういないから、公園でスケッチをしているのだけど、そこで絵を描いている奴が集まって、今度は高尾山にでも行こうかってことになってね」

「スケッチをしているなんて楽しそうじゃない、話してくれればいいのに」

「善福寺公園だよ、家のすぐ裏じゃないか、そんなことをいちいち言うことはないだろう、じゃあ、行ってくるから」と、逃げるように家を後にした。

そういえば、菊次郎は大学時代、美術部に所属していた。それに以前は旅行する時には小さなスケッチブックと水彩絵の具を必ず持っていたが、今でも描いていたのだ。

だが珠子はなんだかしっくりこない。携帯が鳴った時の驚きようは尋常ではなかった。

珠子はカルチャースクールで「歴史探訪」という講座を取っていて、月に一日は教室で探訪する場所の歴史的背景などを勉強し、もう一日は実地で、勉強した場所を散策して来る。そして反省会と称して毎回生徒同士で会食をして帰る。音楽会や芝居見物にも行くが、その度に菊次郎は

「又、出かけるのか！」「何時に帰るのだ！」と大声で威嚇する癖に！  
自分も出かけているのだったら、うるさくいう事はないじゃないの。

何！あの態度！ 仲間とみんなで行くのだったら一人の電話にあんなにうろたえるかしら？ あやしい！

珠子はもう何も手に付かない。いつもなら菊次郎がいない間にビデオにとつてあるサスペンスを見るのが楽しみなのに……。

「ただいま」。菊次郎は五時ごろ帰って来た。

「腹減った、めし」

「仲間と行ったのに食べてこなかったの」

「お前とは違うよ。昼飯をみんなで食って、スケッチをして解散だよ」

なんだ、お夕飯くらい食べてくればいいのに……。そう思いながら台所に行き冷蔵庫をのぞきこんだ。

それにしても菊次郎は、朝の電話で何であんなに驚いたのだろう。珠子は頭の中でまた蒸し返している。本当に仲間とかしら？ とか、約束をしたのに朝の電話で断られて一人で行ったのかしら、とか……。

食事の間中、菊次郎はいつもと変わらず、何も喋るな！ という雰囲気を漂わせていた。珠子は「スケッチブックを見せて」の一言が言えないうちに、食事が終わり、菊次郎は風呂呂に入って寝てしまった。

ふと見ると机の上にスケッチブックが置いてある。真新しい小ぶりのもので、堅い表紙の表裏を紐で蝶々結びに縛ってある。開けてみると一ページ目に滝のある風景があった。滝の横の立て看板に〈びわ滝〉と読めるようなタッチで描いてある。昔、高尾山に行った時に見たような気がする。淡い色彩の優しい絵だった。珠子は一枚だけしか描かれていないスケッチブックを閉じた。

菊次郎にはこんな優しさがあるのだ。珠子が見たいと思っっているのがちゃんとわかっているくせに、照れくさいのだろう。あの人が浮気なんかするわけがない。

六月、二度目のカルチャースクールの日になった。今回は、一度目に学習をした鎌倉の明月院に行くことになっている。

「また出かけるのだろう、何時に帰って来るのだ」

「今日は鎌倉に行くのよ。でもそんなに遅くはならないと思うわ」

「別にどこに行ってもいいけど、飯があるのかないのか、それだけ聞けば良い」

菊次郎はいつもこんな憎まれ口をきく。普段とちっとも変わらない。

「晩ご飯は作っていないから、食べに行くか、好きなものを買ってきて」  
珠子は出かける時にはいつも作らないことにしている。

カルチャースクールのある新宿に出た。ここからマイクロバスで鎌倉まで移動することになっている。

午後一時の集合まで三十分以上時間があるのに、もうカルチャースクールの前でバスが待っている。

今頃菊次郎は、珠子がいないので、裏の善福寺公園にスケッチに行っているのだろうか。仲間と言っていたが、あれから何度も公園に行ってみるが、スケッチをしている人など見たことがない。本当に善福寺公園なのだろうか。そんなことを考えていたら居ても立っても居られない気分になり、バスの前で待機している職員に、気分が悪いから参加できない、と言付けてふらふらと新宿駅に戻って来た。

家に帰ったからってどうしようというのだろうか、珠子は我ながら何を考えているのかと呆れる思いだが、もう鎌倉に行く気持ちはすっかりなくなっている。ふらふらと中央線に乗り込み沢山ある空席のひとつに座った。高架を走る電車の車窓から模型のような家々が見える。ボーッと眺めながら、あの窓の一つ一つにそれぞれの生活があるのだとぼんやり思う。吉祥寺に着いたので反射的に座席を立った。家に帰るにはいつもここからバスに乗る。

だが珠子はバス乗り場とは反対側の井の頭公園の方に歩き出した。今頃帰ったら夫はどう思うだろう、そんなことを考えながら……。

平日なのに大勢の人が歩いている。

あら、菊次郎ではないかしら……。公園に向かう沢山の人混みの中で夫の姿・形はすぐに分かった。思わず身を隠すように歩を緩めた。一人だろうか、誰かが一緒に歩いているのだろうか、目は菊次郎を追っている。

公園に入る広い坂道に差し掛かった。急に視界が開け広場のむこうに池に架かる橋が見える。

菊次郎は橋の方に向かって歩いて行く。

渡るつもりかしら……。横を向いた。右手で景色を指している。身長百八十センチの菊次郎の隣に、珠子より背の低い小柄な女性が見上げるように菊次郎の方を見た。

あら、鶴亀堂の奥さんじゃないの！

その店は吉祥寺の商店街のど真ん中にある和菓子屋で、珠子はよくそこに立ち寄って茶まんじゅうや酒饅頭を買う。そのままでも美味しいが、湯気の立つせいで蒸しているのが購買欲をそそる。たいてい散歩の途中に行くので菊次

郎も顔見知りではあるが……。

二人は橋を渡り切ると弁天様の方に歩いて行って、隣同士のベンチに陣取りそれぞれ絵を描く準備をしている。鶴亀堂の奥さんはイーゼルを立てて、ベンチに油絵の具を広げている。そういうえばあの店の月に一度のお休みは、カルチャースクールの日と同じ火曜日だった。今日はお休みの日じゃないの。

珠子は立ち止まるわけにもいかず、橋の近くのレストランに入った。菊次郎は嬉しそうな顔をして、活き活きと指さしながら何か言っている。あんな夫を近ごろ見たことがない。いつも怒ってばかりいるくせに！ 頭に血がのぼる。黙って見過ごせというの？ 冗談じゃないわ！ でも、ここで出て行って二人でいる所を押さえたら取り返しつかないことになるかも知れない。もし出て行っても私に何が言えるかしら……。

このまま帰ってから夫に聞いても、怒鳴られるか、無視されるか……。睨みつけられて、はいそれまで！に決まっている。

勇気を出さなきゃ！ 珠子さんしつかり、と自分にはっぱをかけて、時計を見るとレストランに入ってからまだ十五分しか経っていない。

珠子は深呼吸をしてから席を立った。レジで勘定を済ませると再び深呼吸をした。そしてゆっくりと歩き出し、池のほとりのベンチから遠く離れた所を歩き、さも偶然見つけたように、ベンチに座ってスケッチブックを広げている菊次郎の方に行き、傍らで、

「あらおうさん、何でこんな所にいるの」と声をかけた。

菊次郎は、心底驚いたようで、珠子の顔と鶴亀堂の奥さんの方とを交互に見て、覚悟が決まったのか、いつものような威嚇する顔になり、

「お前こそ、何でこんな所にいるのだ、カルチャースクールに行くと言って出て行ったじゃないか。ええッ！」

すると、隣のベンチで絵を描いていた鶴亀堂さんが仲裁でもするように

「あら、並木さんの奥さま、こんにちは」

「はあ、こんにちは。油絵をお描きになるのですか？」

珠子は平静を装った。

「ええ、趣味でね。最近、息子夫婦が店を手伝ってくれるようになったので、いつもは朝早くここにきて絵を描いているのですよ。すっかり顔見知りが出て……この間もみんな高尾山にハイキングに行ったのですよ。ご主人様もお誘いして」

「そうですか……。でもおとうさんは朝早く井の頭公園には来ないでしょう」

珠子は半信半疑だった。定年になってからしばらくは散歩に行ってくると言

って何時間も帰って来ないことがあったが……。

「いえいえ、奥さま、私は月に一度の定休日だけは、昼間にのんびりと絵を描きに来るのですよ。それでたまたま絵を描いていた並木さんに声をかけたのです。時々奥さまとご一緒にお店に来て下さる方だと思って。今じゃ、私の朝の顔見知りにも紹介して、すっかり仲間同士です。奥さまは絵は描かれないのですか？」

鶴亀堂の奥さんはこんなにサバサバした人なのだ、珠子は和菓子屋の店先で白い上っ張りを着ていた人が、本当は目がくりくりツツとして表情豊かでチャームングな人なのだと驚いた。菊次郎もそう思ったに違いない。

「おい珠子、帰るぞ」

いつの間にか菊次郎は帰り支度をしている。

「じゃあ滝ちゃん、お先に！」

珠子は慌てて頭を下げて菊次郎の後を追った。鶴亀堂さんが滝ちゃんなの？胸にずっしり重みを背負ったような顔をした珠子をふり返って、菊次郎が

「焼鳥でも食っていくか」、そう言って公園の入り口にある焼鳥屋の暖簾をくぐった。珠子は夫の背中を見ながら、こんなことで騙されないわよと心を新たにしながら案内された席に座った。

菊次郎は、自分で勝手に注文したビールと、それぞれの好きな焼鳥が来ると、全部の櫛を丹念にとって、食べやすいようにしてから、珠子にすすめ、自分も美味しそうにビールを飲み、焼鳥をつまんんでいる。

「善福寺で絵を描いていたのじゃなかったの」

珠子は思い切って言った。

「善福寺だって、井の頭公園だって、気が向いたらどこだって描くさ」

「あれから、善福寺を気を付けて見ているけど、絵を描いている人なんか見たことないわよ」、珠子が言うと、

菊次郎は、いつものように、お前は何時もさもしい人間なのだ！と言わんばかりに軽蔑を露わにしたが、ふつと優しい顔になって、

「鶴亀堂さんが善福寺にいた日は、朝のスケッチ仲間と、ホームグラウンドの井の頭公園ばかりじゃなくて他の所にも行こうって事になって、たまたま善福寺に来ていたらしいよ」

「じゃあ、何でお父さんを誘うのよ」

「面白そうだと思って俺が眺めていたら、鶴亀堂さんが、店に来る客だって気がついて話しかけてきたのだよ。水彩をやるって言ったなら、今度、高尾山に行く計画があるからって……」

「ふうくん、じゃあ、好きな水彩をまた描けるようになって良かったね」

「絵の具があるうちは描くけど、後はどうなるかわからないよ」

「そんなこと言わないで、描けばいいじゃない」

珠子は、何も趣味を持たないと思っていた菊次郎が絵を描いていると知って心底嬉しかった。ビールの酔いもあったかもしれないけど……。

菊次郎は入り婿である。珠子が一人っ子だったので見合い結婚で養子になった。珠子を溺愛していた父親は三十年も前に亡くなったが、母親は九十九歳まで生きた。ボケもせず娘の心配ばかりしていた。その所為か珠子は母親が五年前になくなるまでずっと甘えていた。今でもちつとも育っていない。

毎朝菊次郎に起こされる。

「おい、六時だぞ。ラジオ体操に間にあわないぞ」

彼が声だけかけて下に降り、ラジオを付けて準備をしている所に珠子が起きて来る。始まる五分位前に……：

「今日は寒いかしら」

「自分でわかるだろう」

「起きたばかりだからわからないわ」

「もう始まるぞ」

「あら、そうね」

パジャマのままラジオ体操をして終わる頃には「暑い暑い、今日は暑いかしら」なんて言いながら着替えをはじめた。

〈なんでいちいち聞くのだ！〉菊次郎はムカツとする。

珠子は良く動く。ラジオ体操が終わると朝飯前に玄関、便所、庭の掃除をしている。

「掃除なんか、毎日するな！」菊次郎はイライラする。

「いいじゃない、私の趣味だと思っよ」

「新聞！」

珠子は一瞬ムツとするが、取りに行く。

「めし！」

「ちよっと待って」

珠子の機嫌がだんだん悪くなる。

「掃除なんか後にしろ」

何で？ 私の勝手じゃない！ あなたにやってくれなんて言っていないじゃないの！ 信じられない！



菊次郎はうんざりしている。

こんな毎日を、滝ちゃんに話した。

「たかが掃除をするのに、そんなに目立つようにすることないじゃない、ね」  
滝ちゃんにはわかるのだ。常識があるから。

「そうだろう、これ見よがしに、な」

「その上、朝飯前の仕事が私の趣味だって言うの？ ゲーッ。見せびらかすのが趣味なんじゃないの」、ノリノリで相づちを打ってくれる。

滝ちゃんと話すと気分が晴れる。

「おとうさん、ラジオ体操をやろう、散歩に行こう、買い物に行こう、何で一人でやらないのだ！」

「そうそう、奥さまは、昔からいつも大奥さまと一緒にだったわ。一人じゃ何も出来ないのじゃないの。しばらく見えないと思ったら、今度は菊ちゃんといつも一緒に来るじゃない。」

ひとりで行け！ って、どうして言わないの」

「言えないよ、だって俺、養子なもの」

「そんなあ〜」

完